

目的 農山漁村で用いられていた労働衣服のサシコには多様な形態があり、全国各地に分布していたが、それはどのように形態分類ができているのか、また、そこには一定の普遍性あるいは地域性がみとめられるのか、これらについて、昭和初期から採集されてきた国立民族学博物館所蔵の刺子の標本資料を対象に検討を試みた。

方法 資料を襟の型、袖の型、馬のり・身八つ口の有無、身丈の長さ、仕立て方の6種のカテゴリーにわけ、数量化したコードを附し、類似度の高い似たもの同志を一つのグループとして分類するために資料間のユークリッド距離を求めて類似度に変換してから、クラスター分析（群平均法を用いた）を行い、デンドログラムによって形成された結果から形態を分類した。さらに各々の標本資料の情報（年代、地域、用途、着用者性別など）からその内容を検討した。

結果 クラスター分析による形態分類の結果は、①一部式長着襟型、②一部式じゅばん襟型、③二部式巻袖はんてん襟型、④二部式筒袖じゅばん襟型、⑤二部式特殊袖型（半袖、てっぱ袖）に大きくわけられ、さらに若干の細分化がみられた。知り得る範囲の情報から推定すると、それぞれは、①漁業用労働着、②漁ろう着・農良着、③防寒用上着、④農作業着、⑤農作業着と、その形態は用途の種類によって、ある程度の普遍性をもっているが、地域的には例えば①に青森、新潟、滋賀、宮崎の各県にまたがるなど、分布地域による形態上の差異はあまりないことがわかった。